



第4回 伝説の編集人

谷崎潤一郎事件

文 森 功

text by Isao Mori

新潮社の週刊新潮は二月、徳間書店のアサヒ芸能はそれより遅れること八カ月後の十月、一九五六（昭和三十一年）年には、二つの出版社系週刊誌が誕生した。両方の発案者といえる新潮社の副社長、佐藤亮一が週刊誌の刊行を思い立った理由は、さして難しくない。このままの文芸出版の一本足経営だけでは、行き詰ってしまうのではないか、という不安から、新たな出版事業の柱としようと計画した。それが総合週刊誌の発刊である。

元来、時事問題を扱う週刊誌は新聞社の専売特許とされた。文芸出版社の新潮社には報道経験はあろうか、取材のノウハウすらない。創刊準備で齋藤を手伝ってきた夫人の美和には、朝日新聞に勤める実兄がいた。こう振り返っている。（兄は）しかもこの当時「週刊

という文字がある。この『鴨東綺譚』や五味康祐の『柳生武芸帳』、大佛次郎の『おかしな奴』を三大連載小説と目次に謳い、石坂洋二郎の『青い芽』や中村武志の『目代三平の逃亡』といった小説がメインとなっている。たしかに文芸週刊誌のような体裁だ。

新潮社は週刊新潮の創刊にあたり、派手なテレビCMを流し、東京や大阪に宣伝カーを走らせて広告に務めた。その甲斐あって出版界初の試みと注目された週刊新潮は、まずまずの滑り出しを見せる。創刊号は六十万部を誇っていたトップの週刊朝日の半分にあたる三十万部をほぼ売り切り、勢いに乗った二号目も三十五万部を刷り、そこそこ売れた。ただし、当初の勢いはそう長続きしなかった。

いくら当代指折りの人気作家の小説連載とはいえ、それだけでは、従来の新潮や小説新潮とさほど変わらない。広告の目新しさにも、限界がある。そこへ運悪く事件が

朝日」の編集部員でした。「週刊新潮」のことを事前に何一つ聞かされていなかった兄は、創刊の報に接して驚いたようです。後年、兄からそのことを聞いた齋藤は、言っています。

「そんなにカッコしない。『週刊朝日』は正道を行く。『週刊新潮』はバイパスを走ります。道は全然違うんだから、お互いの道で励みましょうよ」（冬花社『編集者 齋藤十一』より）

ただし、最初はそううまくいかなかった。

「週刊新潮の創刊はどんな雑誌を参考にしたのですか」

九三年四月から二〇〇一年八月まで八年あまり編集長を務めた松田宏が、生前の齋藤に尋ねると、齋藤が答えた。

「初めはアメリカの『ザ・ニューヨーカー』を取り寄せて研究した起きた。谷崎の『鴨東綺譚』のモデルとされた京都の女性が、編集部に乗り込み、原稿を盗もうとして大騒ぎになるのである。この鴨東綺譚事件により、谷崎の連載は二月六日の創刊から三月二十五日発売号の六回目まで、わずかに半月で打ち切らざるを得なくなりました。

創刊後の週刊新潮は連載小説で一定の読者を保っていたものの、創刊した年は部数が安定せず、なかなか新聞社系の週刊誌には追いつけなかった。そこで齋藤は、苦肉の策として当初日曜としていた発売日を五月から火曜日に改め、本格的にテコ入れに乗り出す。松田が言葉足した。

「齋藤さんは週刊新潮で新人作家を発掘していきました。柴田錬三郎や瀬戸内晴美さん（のちの寂聴）でした。たとえば柴田錬三郎は大久保に住んでいたらしい。そこへ齋藤さんがアポイントも取らずに行つてね、とつぜん『君、最近の時代小説はおもしろくないって新

んだよ」

四代目編集長の松田は、齋藤をはじめ野平健一、菅原國隆など側近たちからもしばしば創刊時の話を聞かされたと話した。

「たしかにニューヨーカーは、小説や評論などを掲載する文芸週刊誌だよね。新潮社の強みとは何だ、と齋藤さんが思案した結論が、作家をいっぱい抱えていることだとなったみたい。それで、まずは週刊小説新潮みたいな雑誌にしようとしたんだね。だから創刊号には、本来なら文芸誌の新潮に掲載するような作家が次々と登場している。象徴的なのは谷崎さんだな。ただ、それがすぐに終わっちゃった」

齋藤は創刊号から、豪華な小説の連載執筆陣をそろえた。谷内六郎の描く女の子が浜辺で遊ぶ表紙の左下に「鴨東綺譚 谷崎潤一郎」

聞に書いていたな。つまり、君ならおもしろいものを書いてくれるということか」と注文したらしい。それが、柴練との最初の出会いだったといえます。柴田さんは新潮社の雑誌に小説を書けると聞いただけで感動しちゃって、連載が始まったそうだよ。時代小説では、何と言っても五味康祐の『柳生武芸帳』があるしね。この二大連載小説が当初、週刊新潮を支え、伸びていくきっかけになったんだと思います」

この頃の週刊新潮には、のちに新潮ジャーナリズムと呼ばれた社会風刺の切れ味はまだない。だが、齋藤には自信があった。週刊誌で文学を実践する。齋藤にとって、週刊新潮はその壮大な実験だともいえる。齋藤が朝日新聞に勤めていた義兄に言った「バイパスを走ります」という表現こそが、「酒、カネ、女」という人間の欲望を描くことにほかならない。齋藤はそこに挑戦した。

（敬称略）



Profile

福岡県生まれ。新聞社、出版社勤務を経て2003年よりフリーランスのノンフィクション作家に転身。08年、09年2年連続「編集者が選ぶ雑誌ジャーナリズム賞作品賞」、2018年『悪だくみ』（文藝春秋）が「大宅壮一ノンフィクション賞」受賞。『許永中』『同和と銀行』（講談+a文庫）など著書多数、最新刊は『官邸官僚』（文藝春秋）